96　花誘ふ　嵐の庭の　雪ならで　ふりゆくものは　我が身なりけり

藤原公経



桜

〈声に出してよんでみよう〉

ハナサソー　アラシノニワノ　ユキナラデ

フリユクモノウ　ワガミナリケリ

＊語頭以外のハ行の文字、つまり語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、ワ行音「ワ・イ・ウ・エ・オ」でよみます。[1] 助詞の「は」も、現代語と同様、「ワ」とよみます。

＊「オ段の音＋う／ふ」は、「オー」とよみます。現代語でも、「おう（王）」を「オー」、「さとう（砂糖・佐藤）」を「サトー」とよみますね。これは、歴史的かなづかいの跡が現代かなづかいにも残されている例の１つです。

〈どんな意味だろう〉

桜の花を誘って散らせる嵐が吹く庭は、花の雪が降り行くのではなくて、

古り行く（古くなって行く・年老いて行く）ものは、私の身なのだなあ！

＊「･･･ならで」は、･･･ではなくて、という意味です。また、文末の「なりけり」は、「･･･なのだなあ！」という発見・気づき、詠嘆・感動を表します。

＊「ふりゆく」には、「（雪が）降り行く」と「（人が）古り行く（年老いて行く）」という２つの意味が込められています。このように、同音であることを利用して１つの

表現に複数の意味を持たせる和歌の修辞技巧を「**掛詞**」と言います。掛詞には、31音という限られた形式の中に、重層的な意味を持たせる効果があります。

〈解説〉

現代語にも、「桜吹雪」という言葉がありますね。桜の花びらが舞い散る様子を雪にたとえるのは、古典の時代からよく用いられた技巧です。また、桜の花が散るさまに、自分の身が年老いるさまを重ね合わせて嘆く、という発想は、小野小町の「9花の色は」の歌に似ています。小野小町は、絶世の美女でしたが、晩年は薄幸であったと伝えられています。一方、この「96花誘ふ」の歌の作者である藤原公経は、大きな富と権力を握った政治家です。対照的な2人ですが、季節の移り変わりに伴う人生の感慨は、対等に訪れるようですね。


桜


お金

〈作者と出典〉

藤原公経（1171－1244）は、鎌倉時代前期の京都の公家[2]です。公経は、このころ政治の実権を握っていた鎌倉幕府[3]と親しく、出世しました。1224年、京都の北山に西園寺という寺と山荘を建てましたが、「百人一首」をまとめた藤原定家は日記の中で、その豪勢さを批判しています。西園寺のあった場所には、現在、鹿苑寺（通称：**金閣寺**）があります。なお、定家の妻は公経の姉です。公経のこ

の「96 花誘ふ」の歌の出典は、9 番目の**勅撰和歌集**（天皇の命令で編集された和歌集）である「新勅撰和歌集」です。

---

1 ハ行の子音は、8 世紀頃 [p] から [ɸ]（現代語の「フ」の子音）に変化し、やがて 11 世紀頃、前後を母音にはさまれた語中・語尾の [ɸ] が [w] と発音されるようになりました。なお、[ɸ] が [h]（現代語の「ハ・ヘ・ホ」の子音）に変化したのは、17 世紀頃と推定されています。

2 「武家」に対する語で、朝廷に仕える貴族という意味です。

3 武家による政府を「幕府」、そのトップの人物を「将軍」と言います。